2023.07.01

高天神城の構造と六砦について

加藤理文（(公財）日本城郭協会）

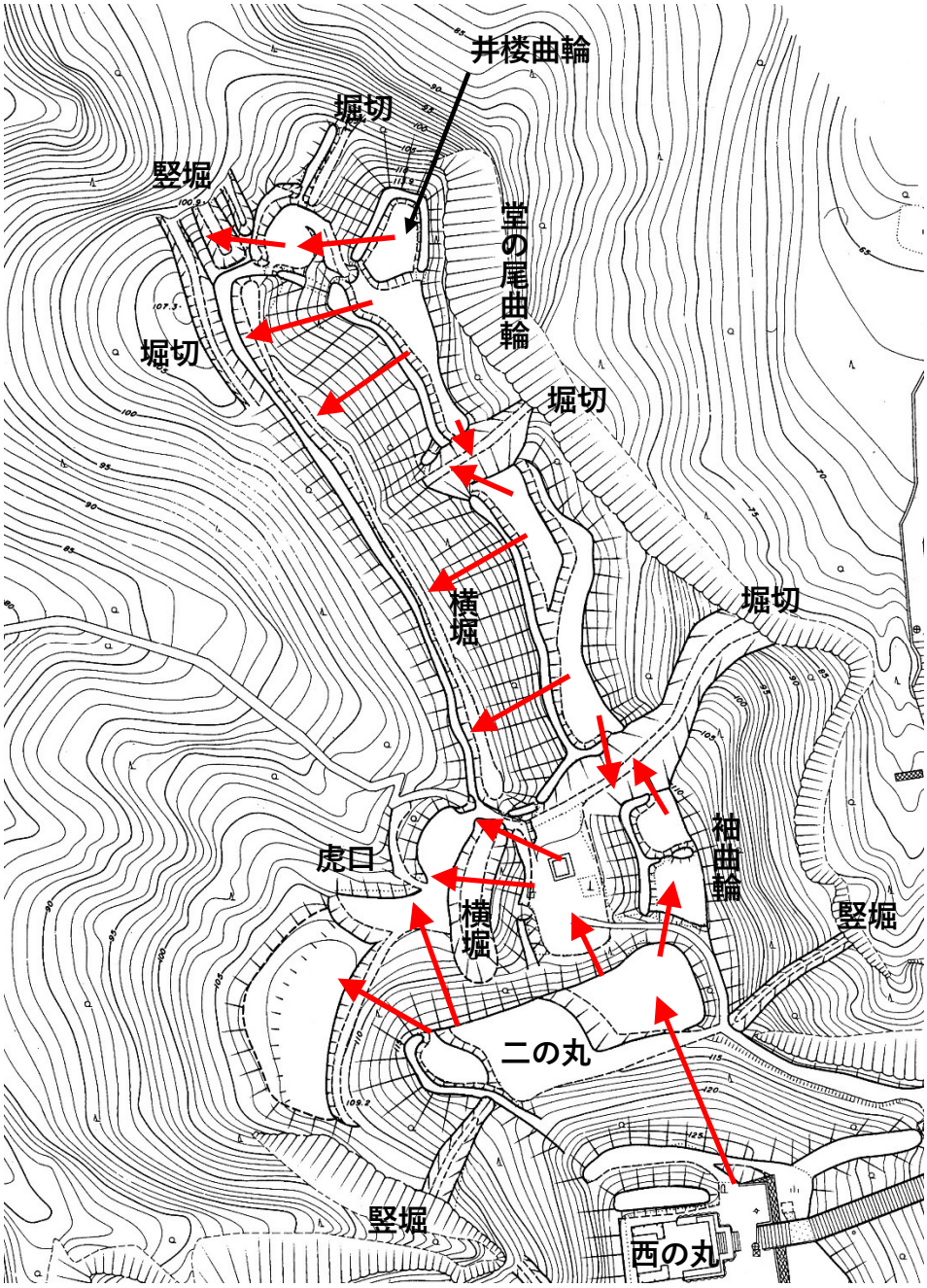
1　武田勝頼の遠江侵攻

元亀 3 年（1572）10 月 3 日、武田軍は、遠江国・三河国への同時侵攻を開始しました。武田信玄率いる本隊は、駿府館から田中城、小山城、滝堺城を通り、高天神城を抜け、袋井、見付から二俣城へと向かいました。山県昌景は、秋山虎繁とともに別働隊を率いて信濃から三河へ侵攻し、井伊谷を抜けて、二俣で本隊と合流しています。武田軍は、徳川氏の本城・浜松城と支城・掛川城・高天神城を結ぶ要所・二俣城を包囲し、奪還しようとしたのです。二カ月に渡り、籠城戦で耐え抜きましたが、城の水の手を絶たれたことが致命的となって、12 月 19 日、助命を条件に開城・降伏しました。これにより、遠江国の北部が武田領となったのです。この後、三方原の戦いがあり、家康が敗戦するも、病状を悪化させた信玄が甲斐へと撤退し、途中で死去しています。信玄の死による武田軍の甲斐撤退により、家康は九死に一生を得るものの、遠江守備の最重要拠点であった二俣城を失ってしまったのです。

第 1 図　武田勝頼の遠江侵攻図

天正元年（1573）遠江侵攻をめざす武田勝頼は、前線基地とするため、大井川西岸の牧ノ原台地上に諏訪原城を築きあげました。築城にあたったのは、武田信玄の重臣で築城の名手といわれた馬場美濃守信房（信春）でした。武田勝頼は、駿河から丸子城・田中城を経由し諏訪原城へと至る東海道筋の侵攻ルートに加え、江尻城から船舶による小山城・滝境城・相良城へと物資を補給するルートを確保していました。

そして、天正２年６月遂に中遠の要衝・高天神城攻略に成功し、ここを兵站基地として、西遠江進出を狙ったのです。そのためには、高天神城最大の弱点である「堂の尾曲輪」周辺の防備強化が必要不可欠だったのです。勝頼は、武田軍の持つ最新鋭の技術を導入し、「堂の尾曲輪」の改修を実施したのです。



第２図　高天神城堂の尾曲輪実測図

２　高天神城の縄張

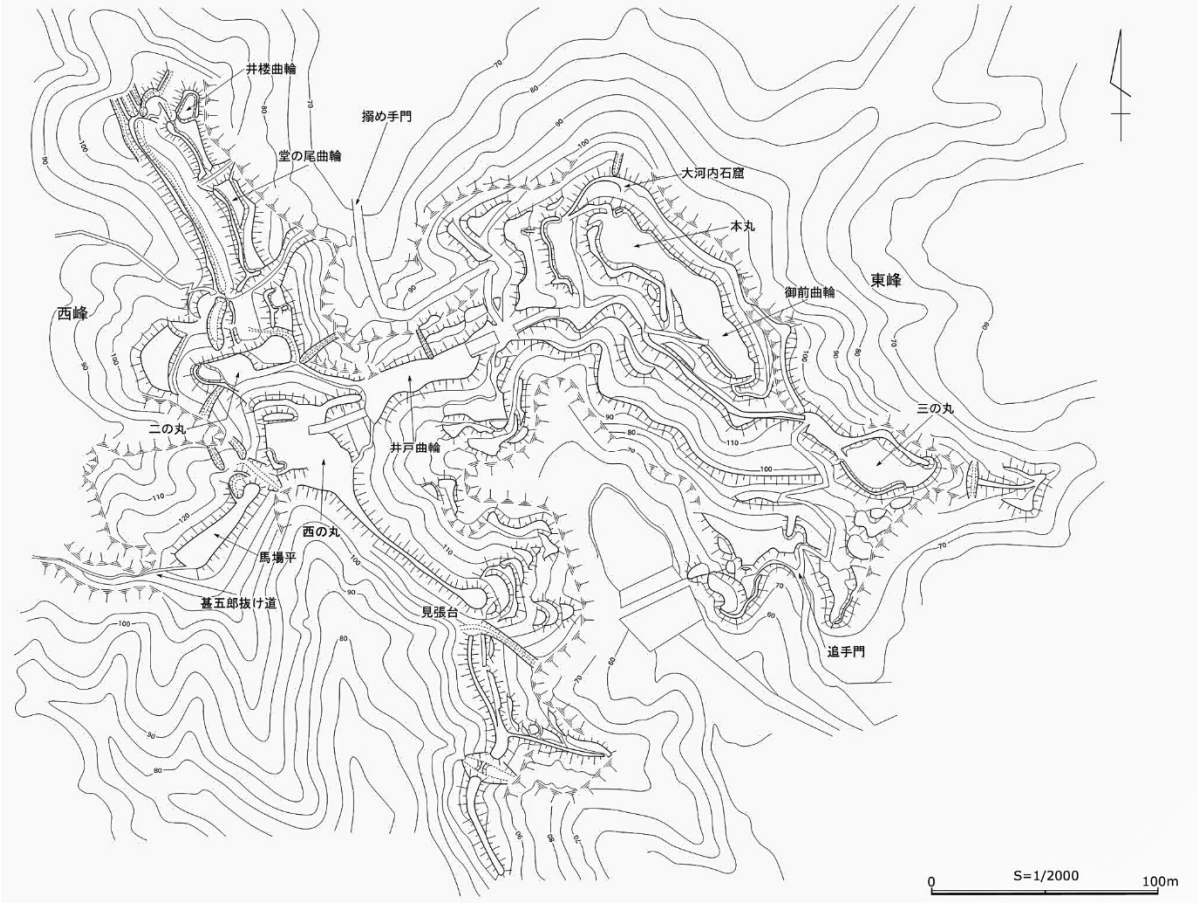
城は東西に広がる丘陵の鞍部に位置する井戸曲輪を境に、東峰と西峰に展開しており、それぞれが独立した曲輪群を形成しています。井戸曲輪が、東西峰を連結する役割を担っているため「一城別郭」の様相を示しています。東峰が当初に築かれた部分で、周囲は断崖絶壁と深い谷に囲まれ、獣すら寄せ付けない天嶮でした。最高所の本丸と東南方向に付設された御前曲輪が中枢部で、西側にのみ土塁が設けられています。南側に一段低く三の丸を配し、その西南下が大手口になります。本丸の西北下に的場曲輪と鐘曲輪を階段状に設け、西北下の橋ヶ谷に位置する搦手からの通路を扼しています。本丸北下に家康の家臣大河内正局が幽閉された石窟が残されていますが、試掘調査により現石窟下層に本来の石窟遺構の存在が確認され、伝承が事実であったことを裏付けました。

西峰は、現高天神社が建つ西の丸が最高所で、南側に続く瘠せ尾根先端部に見張り台、南西下に堀切を挟んで馬場平が配されていました。この馬場平の東端から「犬戻り猿戻り」と呼ばれる山中の隘路が延びています。西の丸北下尾根筋に展開する曲輪群（堂の尾曲輪）が、武田支配下となった天正２年以降に大改修が施された部分になります。高天神城にとって最大の弱点がこの西側の赤根ヶ谷方面で、唯一の緩斜面だったのです。武田軍は、徳川軍がここに強力な防御施設を構築していなかったため、ここから、城攻めを敢行したのです。そして、城を奪取した後は、この危険地帯を守るために、当時の武田軍が持つ最新鋭の技術力を駆使して防御網を築き上げたのです。まず緩斜面部分全体を横切る長大な横堀と巨大な土塁を設け、その上段に南から、二ノ丸、堂の尾曲輪、井楼曲輪を配し、それぞれの曲輪間に圧倒的な規模の堀切を設けました。これにより、緩斜面からの侵入を防ぐと共に、仮に侵入を許したとしても、南に位置する西の丸へ到達できないようにしたのです。さらに曲輪西側にも土塁を構え、斜面は急勾配の切岸となっていまし。発掘調査により、堀切底から橋脚跡、その手前には橋脚へ近づくことを防ぐ箱堀状の四角形の落ち込みが確認されています。曲輪先端部の堀内には畝も検出され、武田軍が総力を結集して、ここを守備しようとしたことが判明しました。

西側斜面から浸入しようとした敵軍は、まず高さ５ｍの土塁に行く手を阻まれ、土塁を越えると幅・深さ共に約５ｍの横堀が関門となっていました。そこから曲輪へ侵入するためには、約15ｍの高さを持つ切岸を登らなければならないのです。この間、城内側から集中射撃を受けることになり、たどり着くのは数えるほどの兵どころか、ほとんどの兵は射撃の的になってしまうことになるわけです。武田軍は普請だけではなく、作事も含めて、ここを守ろうとしたことが解りました。

断崖絶壁に囲まれた斜面で、唯一の緩斜面に敵が殺到したとしても、持ち堪えられるだけの防御施設を武田軍は築き上げたことにより、徳川軍の容易な侵入を防ぎ、５年にも及ぶ籠城戦を可能にしたのです。

武田勝頼は、駿河から丸子城・田中城を経由し諏訪原城へと至る東海道筋の侵攻ルートに加え、江尻城から船舶による小山城・滝境城・相良城へと物資を補給するルートを確保していました。諏訪原城を武田方の兵站基地及び拠点としつつ、後詰とサブの補給路を担う滝境城・相良城背後に持つ高天神城こそが武田方の重要拠点となったのです。



第３図　高天神城縄張図

３　馬伏塚城の改修と横須賀築城

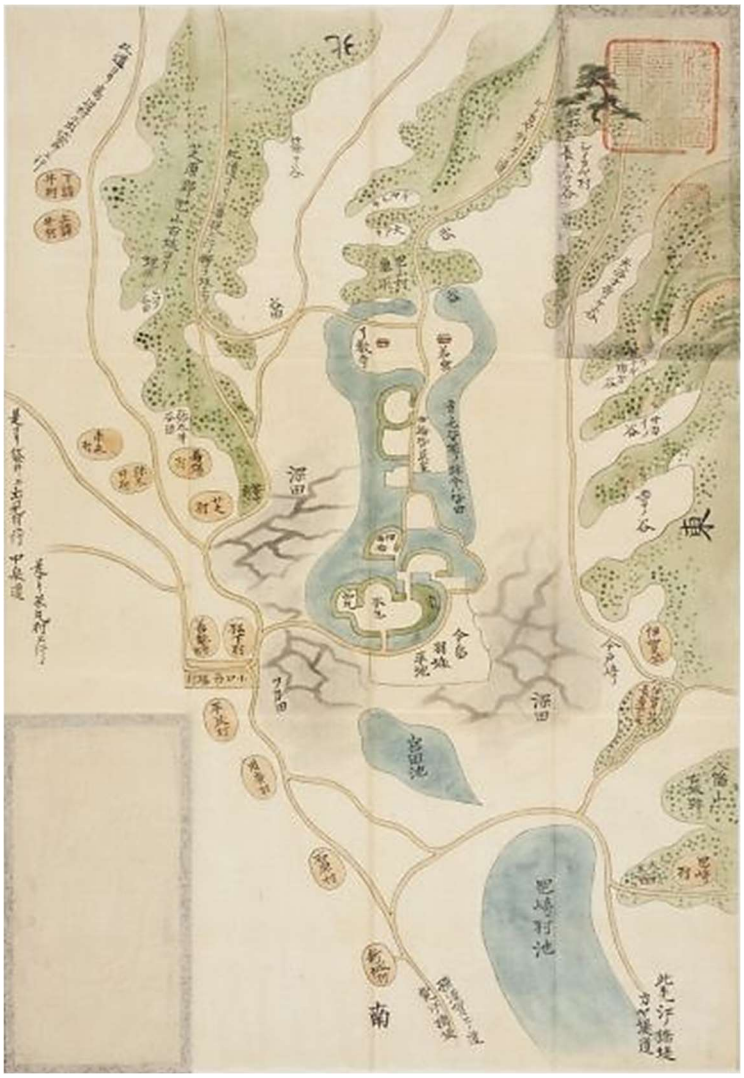
東遠江の要衝・高天神城を奪われた家康であったが、二俣城への備えが最優先課題であり、高天神城にまで手が回る状況ではありませんでした。そこで、小笠山を境に横須賀から浅羽にかけて広がる残存潟湖を利用し、防衛線を設けようとし、その要として白羽の矢がたったのが馬伏塚城だったのです。『家忠日記』には、「遠州馬伏塚ノ旧墨ヲ築カシメ、大須賀五郎左衛門尉康高ヲシテ是ヲ守ラシメ給ヒ、小笠原与八郎ガ旧領ヲ康高ニ賜ル」とあります。高天神陥落後一か月後のことで、当時の家康にとっては、これが精一杯の策だったのです。

馬伏塚城が高天神城の備えとして選択されたのは、残存潟湖が前面に広がり、遠州灘まで見渡せる立地にありました。また、国府・見付からの利便性も考慮されたと思われます。多方面の展開が出来ない家康は、高天神城の武田軍の動きを監視する役目を主目的とする城として改修を実施し、万が一の事態に備えた駐屯・兵站基地の役目を付加し

たのです。この改修に伴い、南側の寺院と墓域を城内に取り込んだと思われます。

高天神城に入った武田勢は、海岸線の街道を利用して頻繁に浅羽周辺域に出没し、徳川方を牽制する動きを見せていました。しかし、天正３年の長篠合戦で、遠江情勢は大きく変化することになります。織田・徳川連合軍の前に武田軍が惨敗を喫したのです。家康は、武田軍の遠江での勢力減退と援軍派遣が困難な状況の内に、遠江における不安要素を取り除くことに全精力を傾注するのです。家康は、直ちに諏訪原城を奪取し、次いで二俣城を奪還、翌４年までには、北遠江の武田勢力を一掃することに成功しました。

天正５年、家康が馬伏塚城へ出陣しています。この時点で、家康在陣が可能な体裁が整ったということだと理解されます。現在は宅地化し旧状をわずかに留める程度ですが、昭和９年に作成された図では、北曲輪群の北尾根続きは、幅約20m、深さ約８ｍの大堀切で遮断され、堀切に接する土塁は幅約７ｍ、高さ約３ｍの規模が残存していたことが判明します。この北曲輪群から、約70mを隔てて南曲輪群が構築されていました。この間には、かつて水堀が存在し、二ヵ所の小曲輪が存在していたことが『諸国古城之図』から判明します。



第４図　「諸国古城之図」馬伏塚（遠江）（広島市立中央図書館所蔵）

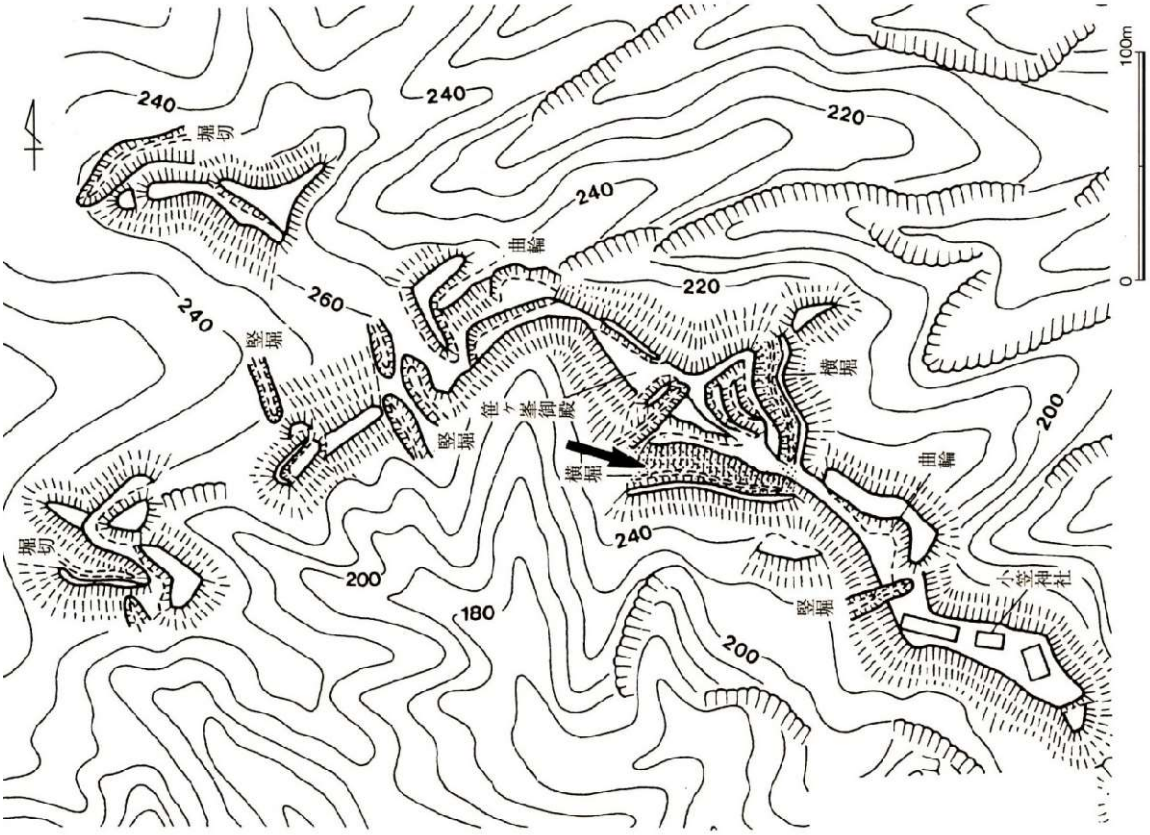
馬伏塚城の南曲輪群のほとんどは四周を土塁で囲まれていました。これは、高天神城攻めの兵糧及び武器保管のためでした。北と南の間の袖曲輪が残存潟湖からの舟入施設で、南側羽城曲輪は、荷揚げのための曲輪と推定されます。本曲輪が盾状の土塁によって東西に仕切られているのも、曲輪内の保管物の違いが存在していたためとしか思えない。小規模な西丸は、弾薬庫や煙硝蔵として利用していたことも想定の範囲です。家康は、城の北側の広大な面積を持つ伝居屋敷に陣所を構築しました。当然、付き従う兵士たちは、その周囲の了教寺や若宮の地を利用したので。巨大な堀切で尾根続きを切断した伝居屋敷は、三方を湿地帯に囲まれた平坦地で、駐屯地としては最適でした。ここに、城は監視目的から、家康の本陣、兵士の駐屯地及び物資中継地として前線に武器や兵糧を調達する後方支援基地としての役割が主目的に変化したのです。

高天神城を孤立させた家康は、さらなる動きを見せることになります。馬伏塚城の南東約 1.5 kmの岡崎の地に、前線基地を移動させたのです。残存潟湖に面した舌状支陵の先端を利用し、横堀を巡らせた方形の土塁囲みの曲輪と副郭だけの城で、明らかに物資保管施設と駐屯目的だけの城だったことが解ります。この前線の移動は、残存潟湖の航路が縮小傾向になったこと、武田方の勢力減退に伴うものと理解されます。さらに天正６年、岡崎城より約三km南東に位置し、遠州灘と直接繋がる横須賀に城を築き、大須賀康高を入城させることになります。これにより残存潟湖の不安定な水運ではなく、確実に船舶が横付けできる港湾と城が確保されたのです。ここに高天神城攻めは、大きな転機を迎えることになったのです。

第５図　徳川家康による高天神城包囲網

4　高天神城攻めの付城群

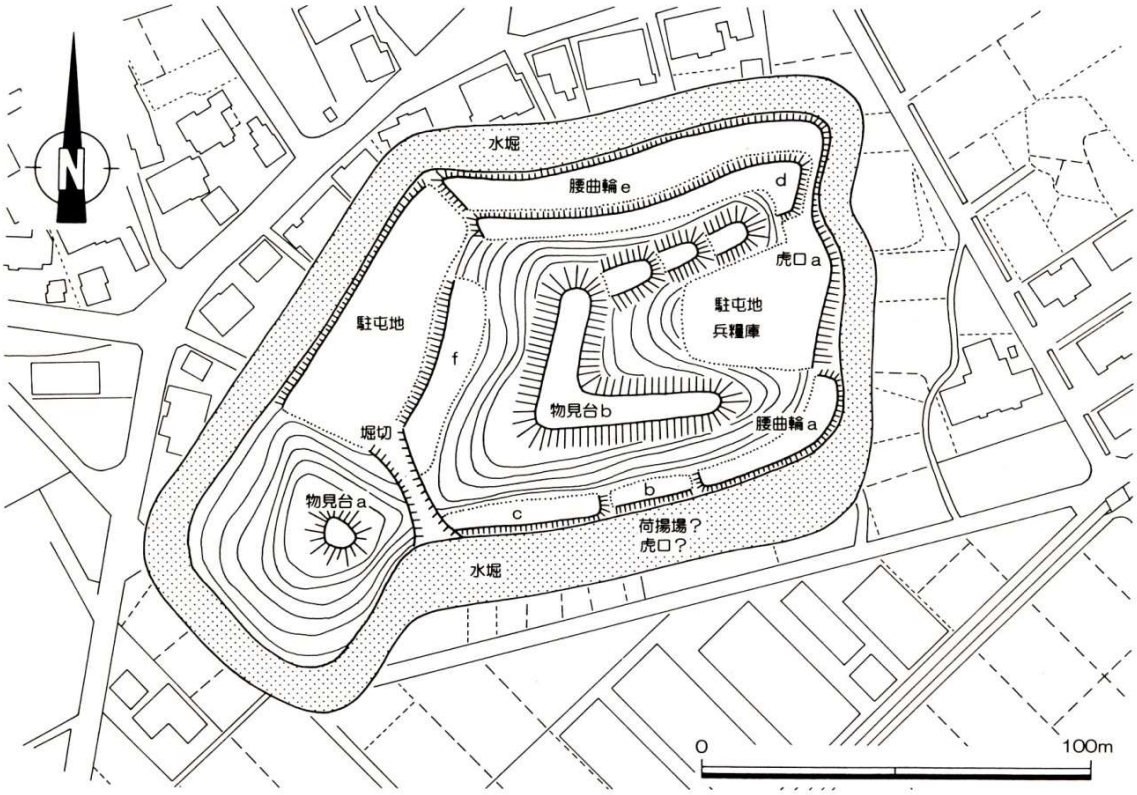
高天神城に対する付城は、当初は掛川攻めでも使用した小笠山砦のみで、主に武田軍の監視目的として利用されていました。高天神城に対する押さえは、当初北の小笠山砦と西の馬伏塚城で対応していましたが、横須賀城という海岸沿いの物資補給基地が完成したことによって、天正６年になると家康は高天神６砦（小笠山砦・能ヶ坂砦・火ヶ嶺砦・獅子ヶ鼻砦・中村ノ砦・三井山砦）と呼ばれる砦群を中心に、10 数か所の砦を構築し、城を完全に孤立させる作戦に出ました。これらの砦は、掛川城攻め、二俣城攻めとは異なり、個々に明確な役割が与えられ、相互に補完をしつつ城を完全に取り囲んでいたのです。



第６図　小笠山砦概略図（作図：戸塚和美）

高天神城に近接する五ヶ所に、城内監視と最終攻撃拠点とすることを目的に、北に矢本山砦、東に山王山砦、西に林ノ谷砦、南に畑ヶ谷砦と星川砦を配置しました。万が一の武田軍の後詰に対応するために東尾根筋、信州街道沿いに宇峠砦、岩滑砦、能ヶ坂砦、火ヶ峯砦、毛森山砦、安威砦、獅子ヶ鼻砦を構築、武田後詰軍への対応を主眼とした配置でしたが、むしろ高天神城内に対し、後詰軍への期待を打ち砕くことも配慮された配置となっていました。高天神城への間道を押さえるために、北に小笠山砦、西に萩原口砦、芳峠砦、南に三井山砦を配しています。これら砦軍への補給基地の役割を担ったのが中村砦でした。横須賀城から残存ラグーン、浜野浦から菊川入江という兵站ルートを

利用し、中村砦に物資が集散されたのです。ここから、各砦に対し物資のみならず、兵力の補充・交換が実施され続けました。天正６年以降の攻城戦においては、明確に機能が分化され、西南からの物資輸送ルート、信州街道・菊川沿いの丘陵に構えられた対武田への防衛ライン、そして城を完全に取り囲む付城。こうして高天神城を、完全に包囲し、確実に城方の戦意を喪失させ、持久戦・消耗戦の中で、味方の兵力の損失を抑え、自落するのを待っていたのです。



第７図　中村城山砦概略図

高天神城に近接する五ヶ所に、城内監視と最終攻撃拠点とすることを目的に、北に矢本山砦、東に山王山砦、西に林ノ谷砦、南に畑ヶ谷砦と星川砦を配置しました。万が一の武田軍の後詰に対応するために東尾根筋、信州街道沿いに宇峠砦、岩滑砦、能ヶ坂砦、火ヶ峯砦、毛森山砦、安威砦、獅子ヶ鼻砦を構築、武田後詰軍への対応を主眼とした配置でしたが、むしろ高天神城内に対し、後詰軍への期待を打ち砕くことも配慮された配置となっていました。高天神城への間道を押さえるために、北に小笠山砦、西に萩原口砦、芳峠砦、南に三井山砦を配しています。これら砦軍への補給基地の役割を担ったのが中村砦でした。横須賀城から残存ラグーン、浜野浦から菊川入江という兵站ルートを利用し、中村砦に物資が集散されたのです。ここから、各砦に対し物資のみならず、兵力の補充・交換が実施され続けました。天正６年以降の攻城戦においては、明確に機能が分化され、西南からの物資輸送ルート、信州街道・菊川沿いの丘陵に構えられた対

武田への防衛ライン、そして城を完全に取り囲む付城。こうして高天神城を、完全に包囲し、確実に城方の戦意を喪失させ、持久戦・消耗戦の中で、味方の兵力の損失を抑え、自落するのを待っていたのです。

勝頼の援軍も無く、孤立した城は、家康に対し降伏の意を示すが、援軍の出せない勝頼の声望を意図的に下げようとした信長の指示もあって拒絶されてしまいます。そして、天正８年満を持した城攻めが開始されました。籠城軍も徹底抗戦しますが、兵糧攻めにより逃亡者も続出、翌年、遂に兵糧が尽きた城兵は、一気に討って出て壮絶な戦いの後、落城することになります。武田方の軍監・横田伊松のみ抜け道から脱出、勝頼に落城を知らせています。実に７年間にわたる攻防戦となったわけですが、繋ぎの城を落とし、補給路を断ち、後詰軍への期待も断ち切り、確実に包囲網を狭めていった徳川軍の計算通りの勝利になったのです。

第８図　高天神城包囲網図